

リレーメッセージ第8回

錦織功政氏（北高 39 期/昭和 63 年卒）

皆様、はじめまして。私は 39 期の錦織功政（にしこり のりまさ）と申します。

東京の大学を卒業後、旧大蔵省（現財務省）に入省し、以後、本省勤務や出向を繰り返して今日に至っています。入省時（平成 5 年）は旧銀行局に勤務し、あの金融危機の最初のステージを目の当たりにしました。のちに住宅専門金融会社（いわゆる「住専」）処理のため投入された国費 6,850 億円——その後の金融危機対応には桁違いの公的資金が投入されるのですが——という金



額は一生忘れないでしょう。特に主計局は人使いの荒い職場で、最初は面白がってやっていた連日の徹夜作業も、そのうち身に堪えるようになり、日曜は一日中寮で寝溜めしておかなければ身が保たない有様でした。結婚後は多少まともな生活になりましたが、午前 4 時に帰宅すると妻から哺乳瓶のバトンタッチを受け、舟を漕ぎながら乳飲み子に授乳させていたのがまるで昨日のように思われます。

その後、在スペイン日本大使館の勤務（一等書記官）を命ぜられて家族一同マドリッドに赴任し、3 年のあいだ一度も日本に戻らず異国の地で悪戦苦闘しましたが、現地の皆さんに助けられて有意義な駐在生活を送ることができました。また暫くの後、次は熊本県庁で企画振興部長として働くことになりました。息子たちも大きくなって東京の学校に馴染んでおりました故、今度は単身赴任。知事公舎真向いに建つ築 40 年の一軒家で昭和期の貧乏学生のような生活でしたが、仕事はとても充実していました。霞が関とはまったく違う視点から地域の課題に向き合い、様々な人々と膝を詰めて向き合いながら議論し、ときに酒を酌み交わしながら相手の想いを汲み取った末に、両者ギリギリの解を導き出す経験は、何物にも代えがたく思われます。ちなみに、どんな地で働こうとも、「此处ではこうなるけど、島根ではどうだろう？」と、つい故郷に想いを馳せてしまうのは何故なのでしょうね。

一昨年前より復興庁に出向し、総括担当参事官として勤務しています。東日本大震災の発災から 9 年が経とうとするなか、今後の復興のあり方を再考して事業や組織のあり方を見直すべき、重要な時代の節目に立ち合う機会を得ました。その他人事や復興大臣のサポート業務まで担当させて頂くなど、非常にやり甲斐のある任務に日々身の引き締まる思いがします。被災地の復興を進めていくと実感するのが、我々の日常生活が様々な方面の様々な（外からは見えづらい）努力のおかげで成り立っているという事実です。官民の事業・サービスだけでなくコミュニティ（人々の繋がり）といった広義の

「社会インフラ」がひとたび崩れてしまうと、元通りにするのには莫大な時間と費用がかかります。この状況を目の当たりにすると、全国各地で進行する「少子・高齢化社会」の行く末を垣間見ているようにも思われます。やはりそんな点でも、故郷の将来が気にかかります。

このように、職業生活はそれなりに充実しておりますが、私生活の充実も、ある意味それ以上に大切なことだと思っています。子供のころから色々なことに手を出してきましたが、今も変わらず続けているのは「魚釣り」だけでしょうか。私も皆様と同じように、物心ついた頃より宍道湖でゴズを釣り、シジミを掬ってきました。上京後は多忙のため一時途絶えていましたが、留学の際にフライフィッシング（西洋式毛鉤釣り）と出会い、帰国後は月一回の釣行を欠かさず愉しんでおります。山緑を縫って溪流に分け入り、澄んだ水面に毛鉤を投じると、ヤマメや鱒がそれを咥えようかどうか逡巡しながら近寄って来ます。それを待ち受けるときの期待と興奮は、煩わしい世事をすっかり忘れさせてくれます。この楽しみだけは決して忘れぬよう、これからも時間を作って溪谷に赴こうと思います。

（第7回赤井泰博氏からのご紹介）

2020年2月12日掲載